日本における礼拝のインカルチュレーション

中　道　基　夫

宣教とは福音と文化とのコミュニケーションであり、欧米から日本に伝えられたキリスト教は日本文化に福音を伝えようとするとき、日本文化の影響を受けると共に、また日本文化にも影響を与えるものとなる。この様な宣教の動きを宣教論的に積極的に評価しようとするのが「インカルチュレーション（文化内開花）」である。

本研究プロジェクトは、礼拝を一つのインカルチュレーションの場として、礼拝で使われる言葉や音楽に注目して研究を進めるものである。本研究の目的は、従来欧米中心主義が支配的であったキリスト教理解から解放され、日本文化とキリスト教との出会いを批判的かつ積極的に評価し、新たなキリスト教の可能性の道を開いていこうとするものである。それゆえ、キリスト教のテーマに関しても、神学だけではなく、社会学や宗教史学的なアプローチによって、この課題に取り組んできたいと願っている。

第1年目である2015年度は、インカルチュレーションについての基本的理解を深め、それぞれの専門分野におけるキリスト教のインカルチュレーションに関連するテーマについて紹介しあうことを目標として進めてきた。

第1回目の研究会では、本研究のガイダンスとして中道基夫（神学部教授）によって「礼拝のインカルチュレーションについて」と題して概論的な発題が行われた。その中で、インカルチュレーションが宣教の課題として議論されるようになった経緯とその定義についても紹介され、本研究のテーマについての理解を深める機会を持った。

この発題を受けて、各研究員の関心や専門領域との関係について意見を交わす中で、礼拝の言葉、弔辞例文、漢訳聖書、賛美歌という切り口から本研究テーマにアプローチすることとなった。

第2回目の研究会においては、山泰幸（人間福祉学部教授）によって「弔辞例文に見る死者の語られ方」と題して、キリスト教の用語である死者の居場所としての「天国」がいつ頃から弔辞例文に登場するか、またその中で遣われている「天国」がどのような意味を持っているかについての研究が紹介された。存在を証明することができない「天国」がことばで表現されるときに、そのことばを共有する社会で存在するものとなるという指摘は大きな示唆を与えてくれるものであった。

第3回研究会では、桐藤薫（神学部・文学部非常勤講師）から「神観念のインカルチュレーション　―漢訳聖書翻訳史の視点から―」と題して、宣教師たちがキリスト教の神観念をどのように漢語圏に伝えようとしたのかについての研究発表がなされた。「翻訳」はインカルチュレーションの初期的・基本的なプロセスであり、その後のキリスト教概念の受容に大きな影響を与える重要なプロセスでもある。

第4回研究会では、「日本語賛美歌のことば～チャールズ・ウェスレー作詞賛美歌の翻訳と受容」というテーマで水野隆一（神学部教授）によって発表がなされ、ウェスレーの賛美歌が日本でどのように訳され、またどのような曲と組み合わされて歌われてきたかをたどり、日本におけるウェスレー神学の受容と変容の問題に迫った。また、数あるウェスレーの賛美歌の中からどのような曲が受容されたかについての分析は、まさに日本におけるキリスト教の受容に通じるものであった。

今年度は、それぞれにテーマについての発表を通じて、インカルチュレーションについての議論を深めることができた。さらに様々な視点から各研究についても新たな視点を得ることができた。2016年度は、さらにそれぞれのテーマを深めると共に、新たな視点を加えて研究の領域を広めていきたいと願っている。